AGORA Special
vol.354
[カナダ]
Story of Northern Lights

神秘の光に包まれて

夜空を光のベールで華やかに彩るオーロラ。
容易には見ることができない不思議な光は、人々に驚きと感動を与えてきた。
緑の光を放つのは、地球だからこその現象という。
未だ謎の深いオーロラを求めて、冬のカナダへ向かった。

水崎彰子＝文　高砂淳二＝撮影
Text by AGORA　Photo by Junji Takasago

カナダの都市、チャーチルの夜空を美しく彩るオーロラ。円錐形の住居は、先住民の人々が丸太を柱に組み立てるティピー。

1 かつて、先住民の人々の移動手段は犬ゾリだった。元気いっぱいの犬たちが引くソリは体験試乗ができる。
2 雪の上を歩行しやすいようにスノーシューを装着。日本で昔から使用されている「かんじき」のような役割を果たす。
3 VIA鉄道のチャーチル駅。構内にはビジターセンターがあり、観光情報のほか、周辺の自然史にまつわる展示などもある。
4 ウォールアートに力を入れているチャーチル。ダイナミックなペインティングが雪景色に色彩を添えている。
5 イヌイットの人々が石を積み重ねて道しるべとしていたイヌクシュク。2010年バンクーバー冬季オリンピック公式エンブレムのモチーフにもなった。

青空の下、森林のなかに設けられたトレイルを歩いて大自然を満喫。次第に汗ばんでくるので、氷点下であることを忘れてしまう。

AGORA Special
vol.354
［カナダ］
Story of Northern Lights

マイナス20℃の銀世界へ

ハドソン湾に面したカナダの都市、チャーチルの小さな空港に降り立つと、まばゆいほどの青空が視界に広がった。辺り一面は真っ白な雪景色。肌に感じる空気は氷のように冷たいが、冬のチャーチルを訪れる人々には期待に満ちた明るい表情がうかがえた。

「昨年も来たのよ。今年もオーロラが見たくてね」

シンガポールから来たという女性が頬を緩ませながら話してくれた。北緯五八度、オーロラベルトの直下に位置するチャーチルは、二月から三月にかけて、オーロラの出現率が非常に高い地域といわれている。人口が一〇〇〇人に満たないほどの小さな都市であるが、この時期はオーロラ観賞を目的とした観光客が世界各地から訪れるのだ。

空港から町に向かう交通手段は車だけだ。車窓から見えるのは、果てしなく続く、雪の大地。視界を遮る建物など何もない。燦々と降り注ぐ太陽の光を反射して、キラキラと輝く真っ白な雪の絨毯の上を進んでいると、未知の世界に迷い込んでしまったような気分に包まれる。しばらくすると、遠方に石を積み重ねた大きなオブジェのようなものが見えてきた。

「あれは『イヌクシュク』だよ。かつては、先住民イヌイットの人々が石を積み重ねて作っていたんだ」

と運転手が説明してくれた。イヌクシュクにはさまざまな形があり、標識の役割や、猟をする際、獲物に似せた石像を作ってカリブーをおびき寄せていたとも伝えられている。このイヌクシュクがいつの時代のものかはわからないそうだが、現在も道しるべになっていることは確かだった。

美食と オーロラの 饗宴

食事前、夕闇に染まりゆく空の移ろいを車内から楽しむひと時。
天井からも空が見えるので、車内とは思えないほどに開放感溢れる空間だ。

町の中心地には、マニトバ州の州都、ウィニペグとを結ぶVIA鉄道の駅があり、その周辺にはスーパーマーケットと数軒の飲食店、宿泊施設、平屋住宅が一画に集まっている。冬の気温はマイナス二〇～三〇℃になるため、歩いている人の姿はほとんど見かけないが、マイナス一〇℃まで上がった日は、「今日は暖かいね」と言って人々が家から出てくるそうだ。

そんなチャーチルでは、ツンドラバギー(車)のなかで食事をしながらオーロラ観賞ができる冬季限定のツアーがあるという。「Dan's Diner」だ。オーロラは見たいけれど寒いのは苦手という方におすすめだ。

地上約一〇〇kmから約一〇〇kmまでに及ぶ範囲で発光するオーロラの仕組みは非常に複雑で、未だ謎に包まれていることも多い。現在、第一線でオーロラ研究を続ける国立極地研究所の片岡龍峰准教授によると、「オーロラを見ることは、宇宙空間を見ること」なのだという。

「オーロラが光るには、太陽風、地磁気、大気の三大要素が揃うことが必要です。約四六億年前、宇宙空間に太陽、地球が生まれて、大気を纏い、やがて地磁気が発生しました。その進化の物語を私たちはオーロラとして見ているのです。よく目にする緑の発光は、酸素原子のある惑星でしか見ることができません。なぜなら、植物が生息するのは地球だけだからです」

赤の発光も酸素原子だが、緑の発光よりも真空に近い場所で光を放つという。青は窒素分子イオン、ピンクは窒素分子の発光による色だが、季節によって太陽風の速度や地磁気の角度が変わるので、オーロラは一瞬たりとも同じ表情を見せることがない。それほどに複雑で魅力的な光なのだ。

今宵のゲストを乗せたツンドラバギーは夕方に町を出発し、凍りついたチャーチル川を横断して町から離れた原野へと向かう。天井までガラス張りになっている特別車のため、ゆっくりと夕闇に包まれていく景色を暖かい車内から眺めることができた。

ディナーコースはデザートを含む七皿。「このレタスはチャーチルのコンテナ植物工場で育てたものだよ」とシェフが味見をさせてくれた。野菜栽培に適さない北極圏エリアに向けた、生産プロジェクトが行われているという。ブラックライスやジャガイモを使った素朴でシンプルなメニュー

1 魚のメニューは、ホタテとエビのソテーにブラックライスを添えて。
2 食事は1コースのみ。おすすめのカナダワインをオーダーするゲスト。
3 コンテナ植物工場で育った葉野菜のサラダを作るDan's Dinerのシェフ。
4 まろやかさが際立つ、天然氷で割るカナディアンウィスキー。
5 今宵のオーロラの出現を願って、「乾杯！」。

DAN'S DINER

AGORA Special
vol.354
[カナダ]
Story of Northern Lights

オーロラが見える条件は、晴れて雲がないこと。周囲に人工の光がなく、空が暗い時間帯であること。この日は雲が厚くて心配されたが、みんなの願いに応えるかのようにオーロラが姿を見せた。